

アーサー・マッケンの「パンの大神」の錯綜した
形式について

山内 暁彦

Structural Complexity in “The Great God Pan”

by Arthur Machen

YAMAUCHI Akihiko

Abstract

This essay examines structural features of “The Great God Pan,” describing the relationship between main characters, the difficulty in grasping the time scheme of the story, the interruption in the description of strange occurrences, and the significance of letters, memoirs, reports and Latin inscriptions. Attention is paid to why the novella has such a complicated structure, why readers must appreciate the process of rearranging the order of things described in random order and why readers should imagine what is not written explicitly in the story due to the restrictive morality at the time of the publication. There is also discussion of how documents are inserted in the narrative in order to help readers understand plot and main theme and understand how the god Pan symbolizes situations in which ordinary people are not aware of the hidden reality beneath the surface of daily life. The novella should be treated as a peculiar story that arouses a sense of mystery rather than being a mere horror story.

序

アーサー・マッケン(Arthur Machen 1863-1947)の出世作である中編小説「パンの大神」“The Great God Pan”は、英米の幻想文学・恐怖小説・怪奇小説の分野では古典的な作品の一つになっている。例えば、古くは恐怖小説の大立て者ラヴクラフトも、自身の *Supernatural Horror in Literature* の中で、マッケンの本作品を「白魔」“The White People”や『三人の詐欺師』*The Tree Impostors* とともに激賞している。¹ 我が国でも、恐怖小説界の草分けであり、マッケンの紹介者でもあった平井呈一は、「かれの生涯の数多い作品のなかでの傑作の一つとして、今もなおお光栄を保っています」と述べている。² この作品は、ラヴクラフトを始めとする怪奇小説の作家たちにも大きな影響を与えただけでなく、現代でも、多くの国で固定的な愛好者は大変多いのではないだろうか。

その内容をまとめれば、脳にある種の施術を受けた女性が「パンの大神」を見たことで正気を失いながらも、9ヶ月後に娘をもうけ、直後に亡くなる。娘は少女時代に、近所の男の子を廃人同様にしてしまったり、友人の少女を死に至らしめたりする。更に彼女は長じて後、ロンドンで二重生活を送りながら、幾人もの男性を快樂のとりこにし、それぞれを惨たらしい自殺に至らしめる。ついには事件に終止符を打つべく自宅に乗り込んだ男たちの手により彼女もまた縊死に追い込まれる。そして、死に至る際に、彼女は禍々しい肉体的な変化と退行を遂げる。作中ではその様子が“from woman to man, from man to beast, and from beast to worse than beast . . .”と描かれている。³

脳への外科手術や薬物の使用、電気への言及といった現代科学の要素もありながら、古代の隠された異教の神パンが現代の文明社会に復活し、一人の女性の介在によって多くの男性が謎の自死を遂げてしまう恐怖を描き、1894年の出版当時から悪評の芬々たる問題作である。さすがに今日感覚で判断すれば、もたらされる恐怖は往時ほどの衝撃はないにせよ、幻想文学・怪奇小説・恐怖小説の歴史に残る傑作であることに変わりはない。

¹ H. P. Lovecraft, *Supernatural Horror in Literature* (New York: Dover, 1973), 11-106.

² 平井貞一訳『アーサー・マッケン作品集 第1巻』（東京：沖積社、1994年）、339頁。

³ Arthur Machen, “The Great God Pan”, Vol. 1 of *The Three Impostors and Other Stories: The Best Weird Tales of Arthur Machen*, ed. S. T. Joshi (Oakland, CA: Chaosium, 2001), 50. 作品からの引用はこの版により、本文中の括弧内に頁数を示す。

一方、その形式は、基本的には全知の作者による三人称の語りに基づいていて、幾人かの男性を主な登場人物としながら、会話で成り立っている部分も多くあり、それに手紙や手記、覚書きや報告書の類を織り交ぜつつ物語を進めて行くという方式である。更には、新聞の記事や古代の碑文から、ラテン語の序文が付けられた素描集や肖像画までが紹介されている。絵は別にして、本文には作者の地の文や人物の会話以外に様々な引用文が含まれているという構成になっているのである。

だが、以下のことは作品の内容とも関わる事であるが、物語の中で起こった事件・事故の、時間的な前後関係が必ずしも明確であるという訳でなく、時系列的な筋の理解にかなりの労力を要するものである。また、怪異な状況を描いた部分の記述が途中で終わってしまっている場合が数多く見受けられ、読者の興味は掻き立てられるものの、もっと核心に触れる記述があっても良いのではないかという疑いも同時に起こる。各登場人物は、一応よく描き分けられているものの、場合によっては各人が似た面を持っていて区別が容易でないし、登場人物同士の友人関係、知人関係が複雑に絡みあっている。様々な謎に関して言えば、誰が何を知っていて、誰が何を知らずにいるか、知らなかった情報もたらされたのはどの段階であったのかななども把握しづらい。各人物の描き分けが十分なされていない書かれ方になっていると言える。

従って、この作品の最大の特徴は、その不気味な内容もさることながら、錯綜した形式にあると考えられる。マッケンは自らの物語をなぜこのように、必ずしも理解が簡単ではない錯綜した形式で描いたのだろうか。その理由として考えられることはいくつか挙げられるだろう。執筆の時点でマッケン自身が小説の技法に長けていなかったということもあるであろう。富山太佳夫が述べているように「彼には綿密な筋を作りあげる職人性が欠けていたし、それを補填すべき奔放な想像力とも縁がなかった」ということかもしれない。⁴

だが、より本質的には、自分の書いている作品の内容があまりにも衝撃的であったために、一般の読者に対してあまり大きな衝撃を与えないようにせねばならないという配慮が根底にあったのではないだろうか。このことに関して R. E. Robert は次のように述べている。

I have the feeling that sometimes Mr. Machen is himself frightened at what he

⁴ 富山太佳夫、「夜、歩く人」『幻想文学』第4号（東京：幻想文学会出版局、1983年）63頁。

has evoked, and seeks refuge; but you can divert from great horror only by great laughter, and Mr. Machen, although he is a good appreciator, has no gift for high comedy.⁵

本論では、作品の形式がいかに複雑になっているかを検証することを通じ、作品の異様な内容とそれから醸し出される奇怪さ・醜悪さが、形式が複雑で簡単には理解し難いものになっていることによって、かなりの程度割り引かれている様子を検証し、形式的な煩雑さがいかなる意味を持っているのかを考察する。そして、幻想文学・怪奇小説・恐怖小説の作品としての「パンの大神」が持つ特質とその意義について論じてみたい。

I

まず、作品全体の構成と物語の流れを章ごとに確認しておこう。第1章は「実験」The Experiment と題されている。レイモンド博士 Dr. Raymond とクラーク Clarke が語り合っている場面で始まる。クラークが休暇を取ってレイモンドを訪問して来たのだ。周囲の田舎の風景も描かれている。レイモンド博士がメアリー Mary という娘の脳にある実験を施す様子が述べられる。この出来事が、本作で語られる様々な事件事故の根源になる。ただし、実験そのものの具体的な記述はない。レイモンドは「灰色の物質に少し傷をつけるだけだ」“a slight lesion in the gray matter, that is all” (2) と述べるに留めているし、実験に立ち会ったクラークは、実験の最中に眠気に襲われて手術の模様をしっかりと目撃していないことになっていて、作者自身も手術自体の記述を曖昧なままにしている。パンの大神を見たメアリーは、術後に白痴同然になってしまう。

第2章は「クラーク氏の備忘録」Mr. Clarke's Memoirs と題されている。この「備忘録」は、作品の特徴の一つである色々な書類の引用の最初の例である。ここでは、前章の二人の男性登場人物の片方であるクラークが、ロンドンの自宅で怪奇現象を扱った書類の編集作業をしている様子が述べられる。彼は独身で実業家らしいが、趣味が怪奇現象の草稿作りなのである。その草稿のタイトルは、“Memoirs to prove the Existence of the Devil”であり、彼が読み返しているのは知人フィリップス博士 Dr. Phillips からの聞き書きの部分である。その内容は、友人同士であるヘレン Helen V. とレイチェル Rachel M.、近所の男の子トレ

⁵ R. Ellis Roberts, “Arthur Machen”, *The Sewanee Review*, vol. 32, no. 3, Jul. 1924, 355.

ヴァー Trevor W. という 3 人の子供たちの間に起きた二つの怪異な事件の報告である。事件は共に人気のない森の中で起きる。森の「変な裸の男の人」“a strange naked man” (11)と同様の、ローマ時代の異教の神の頭部を見て卒倒したトレヴァーは、再起不能の白痴になってしまう。その6年後、同じ「森の男の人」におそらくは陵辱された結果、レイチェルは自殺する。二つの事件そのものは前章から10数年後に相次いで起こったことであり、更にその約10年後が、現在、クラークが「備忘録」を見ている時間である。「備忘録」の末尾には意味深長な“ET DIABOLUS INCARNATUS EST. ET HOMO FACTUS” (14) という文言が書き加えられていた。⁶

第3章は「復活の都」The City of Resurrections である。第1、2章の舞台は草深いウェールズの田舎だったが、第3章以降はロンドンが舞台となる。復活の都とは直接的にはロンドンのことである。章の前半では、かつての友人同士であるハーバート Herbert とヴィリヤーズ Villiers が主な人物である。乞食にまで零落したかつての大学の同窓生ハーバートが、ヘレン・ヴォーン Helen Vaughan という名の自分の妻のために身も心も損なわれた事情をヴィリヤーズに語る。章の後半にはオースチン Austin というヴィリヤーズのもう一人の友人が登場する。ロンドン市内のポール街での死亡事故の顛末がヴィリヤーズに対してオースチンによって語られる。ハーバートの自宅の外で、深夜、ある男性が非常な恐怖のために亡くなったという事件である。時間的には第3章は前章と連続しているようだ。しかし、章の後半部分で語られる死亡事件は、2、3年前に起こったこととされていて、時間が前後している。また、ここまでのところで、主な登場人物は、男性5人、女性1人だ。この計6人の成人、レイモンド、クラーク、ハーバート、ヴィリヤーズ、オースチン、ヘレンのいずれかが主人公であろうが、この段階でははっきりしない。

第4章「ポール街での発見」The Discovery in Paul Street では、ヴィリヤーズがクラークを訪問し、ポール街での体験について語る。クラークは第1、2章の登場人物であり、ヴィリヤーズは第3章以降に登場していたのだが、この第4章で、これまで出て来た人物の関係が一つつながったことになる。ヴィリヤーズは、死亡事件のあったポール街20番に自ら出向いたが、その家で大変不気味な感覚に襲われたこと、そこで奇妙な風貌の女性の線画を入手したこと、ハ

⁶ このラテン語には英訳は付けられていない。この謎めいた文言を仮に訳してみると「悪魔は化身し、人間は創られる」となろう。次章のタイトルや、作品全体の流れを考え合わせれば、悪魔が化身してヘレンの姿を取って現世に復活して来るということを暗示しているようだ。

ーパートが最近孤独死をしたという記事を読んだことをクラークに明かす。⁷ 一方、肖像とその裏に書かれたヘレンという名を見たクラークは、相当な衝撃を受ける。彼は、かつてメアリーに施された脳への実験のことを想起するが、ここでは多くを語らない。

ところで、これまででヘレンという名の女性は3度言及されたことになるが、これは同一人物だろうと想像することはさほど難しくない。謎はヘレンとメアリーの関係であるが、彼女らが実の母と子ではないかと推測することも、この段階で十分可能かと思える。メアリーとヘレンがもし親子であれば、第1章から少なくとも20年は経過しているはずである。また、作品をこの辺まで読み進むと、人物中ではヴィリヤーズが最も主人公に近いのではないかという印象が強くなる。

第5章「忠告の手紙」The Letter of Adviceの人物はオースチンとヴィリヤーズ。第3章と同じ組み合わせだ。この章も前章と同様に人物間の会話で成り立っている。始めに、前章の数ヶ月後にヴィリヤーズに届いたとされるクラークからの手紙が扱われる。書中でクラークは、全てを忘れろとヴィリヤーズに忠告する。この手紙が作中の書類の第2番目ということになる。次いで、アシュレー街のボーモント夫人 Mrs. Beaumont にまつわる奇異な噂がオースチンによって語られる。彼女は、何と千年ものの葡萄酒を持っており、アーゼンタイン卿を始めとする多くの高位の人々をも引きつけている謎めいた女性だ。次いで、画家メイリック Meyrick の死の事情が明らかにされる。故人メイリックは、オースチンの知人であり、自分が描いた素描集を以前南米からオースチンに届けていたのだ。それには序文の形で “*Silet per diem universus, nec sine horror secretus est; lucet nocturnis ignibus, chorus Ægipanum undique personatur: audiuntur et cantus tiliarum, et tinnitus cymbalorum per aram maritimam*” (30) というラテン語の文句が添えられている。⁸ その絵の内容たるや、禍々しい悪魔の、サバトの光景であった。その画集には末尾にある女性の肖像画が描かれていた。

⁷ 空き家での怪奇現象の体験に関しては、作者はブルワー・リットンの『幽霊屋敷』などの先例を踏まえている。

⁸ この文句にも原文では英訳が添えられていない。The Creative CAT 訳では「昼は彼鎮まり返れども、世は尚恐れから解かれ得ず。夜ともなれば炎と輝き、四方より響く牧神の歌高らかに、呼ばう笛と銅鑼の音ぞ海辺にても聞こゆなれ。」となる。<<http://www.asahi-net.or.jp/~yz8h-td/misc/ggpan10ja.html>>

聞き慣れない Ægipan とは、Goat-Pan (山羊のパン) の意。元来は、普通のパンとは異なるものだが、本作品では両者は同一視されているようである。

それを見てヴィリヤーズはハーバート夫人であると言う。メイリックの死にもヘレンが関与していたのだ。

第6章「自殺」The Suicides（複数形である）は、アーゼンタイン卿 Lord Argentine をはじめとする計4人の上流階級の男性が同じような方法で続けて自殺するという事件が中心。オースチンがアーゼンタイン卿の、ヴィリヤーズはヒーリーズ Herries の、それぞれ知り合いということになっている。オースチンは、アーゼンタイン卿が死ぬ前の晩にポーモント夫人と会食をしたことを知っており、そのことをヴィリヤーズに告げる。次いで、5人目の犠牲者であるクラショー Crashaw が自殺を遂げたことを報じる号外がもたらされ、それに載った記事が紹介される。これまた文書の引用である。クラショーの死の直前に、ヴィリヤーズが恐怖におびえる彼の姿を偶然見かけたということもあり、ここに至って、あたかも素人探偵のようにヴィリヤーズが探索を続けていることが分かる。それとともに、元々知人同士であったり、街中で人を偶然見かけたことになっている点などが、多少不自然な感じを起こさせもする。一方、度重なる人の死によって作品の雰囲気はますます暗くなっていくと同時に、死の原因そのものが謎のままになっていることで、読者の興味はますます掻き立てられて行く。

第7章「ソーホーでの邂逅」The Encounter in Soho では、ソーホーでポーモント夫人に出会ったと言うヴィリヤーズからオースチンは彼女の情報を得る。彼女は、以前はミス・レイモンドと呼ばれていた、つまりメアリーに脳の実験をしたレイモンド博士の養女として育てられていた人物であり、少女時代に里子に出されヴォーンの姓となり、長じて後はハーバートの妻となり、彼の死後に再度名を変えて、現在はポーモント夫人になっている、というのである。メアリーの受けた変容を彼女は遺伝的に受け継いでしまっていることが明らかとなり、ここに至って、読者はかねてから推測済みであったこととは言え、ロンドンで連続した自殺と南米でのメイリックの死、ロンドンでのハーバートの死、ひいてはかつてウェールズでレイチェルやトレヴェアの身に起こった事件には、実は一人の女性が関与していたということが明らかとなり、作品の大きな謎にある程度ははっきりとした解決が与えられた形になる。

第8章は「断片」The Fragments と題されている。作品の締めくくりは、登場人物の会話や作者の地の文はなく、3件の書類が順に読者の前に提示される形になっている。最初の文書は、マシスン博士 Dr. Matheson の、元はラテン語で書かれた草稿の英訳、次に、クラークからレイモンドに宛てた手紙、そして、レイモンドからクラークに宛てた手紙の計3件である。それぞれには、ポーモ

ント夫人ことヘレンが死んで行った際、マシスン博士が目当たりにした、彼女が変容を遂げる様子の詳しい報告、クラークが訪問したかつての事件の現場、ウェールズのケールメーン *Caermaen* に残された遺物や発見された碑文の銘が紹介される。本文中にはラテン語の原文が始めに記されている。

DEVOMNODENTi
FLA^vIVSSENILISPOSSV^{it}
PROPTERNVP^{tias}
*qia*SVIDITSBVMB^{Bra}

小文字でイタリックスになっている小文字の部分はクラーク自身が欠落箇所を補ったという設定になっていて、芸が細かい。次いで以下の様に英訳も付けられている。これも、クラーク自身の訳であるという建前である。“To the great god Nodens (the god of the Great Deep or Abyss), Flavius Senilis has erected this pillar on account of the marriage which he saw beneath the shade.” (49)⁹

最後に提示されたレイモンドの書簡では、彼がメアリーに施術をしたことでは、結果に対する配慮が足りなかったことを認めるとともに、ヘレンの死の模様をあらかじめ予測していたことなどが語られる。そしてその最後は、“And now Helen is with her companions. . .” (50) という謎めいた文句で終わっている。これら三つの文書は、作中で語られた一連の怪異と謎の総まとめの役割を果たしている体裁になっている。また、ここではレイモンドとクラークが手紙のやり取りをしたことが想定されるので、二人の会話で始まった第1章と最終章とが円環構造を形作っていることになる。それと同時に、ヘレンの仲間がどのような者たちなのかという新たな謎も提示され、余韻を残して作品全体は締めくくられている。

II

以上簡単に見て来たように、この作品は章ごとに話はまとまっているとは言え、いくつかの点で問題を抱えていることは否めない。まず、作品の中心人物が誰かという点についてだ。主人公的な人物としては、ヴィリヤーズが挙げら

⁹ 見慣れない the great god Nodens (ノーデンスの神) に「大いなる深淵の神」という説明が付けられていて分かり易い。この異教の神もまた *Ægipan* と同様に禍々しいイメージが付与されている。

れる。彼が最も登場する場面が多く、しばしばロンドン市中でいろいろな情報を得て来るからだ。だが、彼は友人のオースチンとお互いに情報をやり取りしつつ事件の概略を共に知って行く、それと同時に読者にも情報が伝わる、という手法になっているので、両者それぞれの印象が薄くなってしまっている。極端に言えば、彼らはお互いに取り替え可能なような印象すら読者に与えてしまうのだ。

更に、事件の発端を作った人物は、メアリーの脳を傷めたレイモンド博士だが、彼自身は作品の中で大きな役割を果たしているとは言いがたい。例えば、メアリー・シェリーMary ShelleyのフランケンシュタインFrankensteinとは異なり、実験の責任を負うことはない。彼は、作品の結びとなる手紙を書いていることになっているものの、作品全体を通じては物語の外にいるような印象である。そうすると、悪魔の存在について大きな関心を持ち、なおかつ実験の目撃者となったクラークこそ、レイモンドの代わりにメアリーやヘレンの身辺を探り謎を解く中心的な役割を負うべきかとも思われるが、そうであってもいい。彼は、自室に閉じこもって昔の覚書きを読み返したり、時にヴィリヤーズから報告を受けたりするにとどまっている。

一方、ロンドン市中を暇に任せて日夜右往左往するのは専らヴィリヤーズである。彼が得た情報は、クラークにもたらされるが、その際にも真相が徐々に読者の目にも明らかにされるという手法になっている。最終章では先述のように男たちがヘレンにいっぱい引導を渡しに行くのだが、詳細な記述はマシスン博士の手記が受け持っている。もし、首を括るための麻縄まで用意してヘレン宅へ乗り込んで行き、死ぬ現場に立ち会っていたヴィリヤーズが、ヘレンの死ぬ様子を報告する役目を果たしていたら、彼が一応主人公であるような体裁は整ったであろうが、そうであってもいい。結局、この作品での主人公が誰であるかは即座に決めがたいようである。

また、この作品では時間の経過の説明が必要最小限に留められているため、事件の前後関係を理解するのに苦勞する。もちろん、作中には所々時間の経過を示す文言を見出すことはできる。例えば、第3章では、オースチンが、“Weren't you in town three years ago?” (18) と、ポール街の事件を知らなかったヴィリヤーズに向かって尋ねる台詞によって、事件がこの会話に先立つ3年前に起こったことが分かるように書かれている。第4章の冒頭は「2、3ヶ月たった後」という文言で始められているし、第5章で扱われているクラークからの忠告の手紙は、前章の時点から「数ヶ月後」に届いたことになっている。また、全体としては過去から未来へ流れる時間軸に沿って物語が進行していると言って良い

ので、マッケンはある程度は伝統的な小説の書き方に則って作品を書いていると言えるだろう。

しかしながら、この物語の全体を通して、各出来事が本当はどのような順序で起こったのかをごく細かなところまで上手く筋道立てて説明することは、そう簡単ではない。一例を挙げれば、クラシヨーの死についてがそうだ。作品で述べられる順序では、まずオースチンが新聞の号外を入手し、その中のクラシヨーの死亡記事を読み上げる。次いで、ヴィリヤーズが死ぬ前のクラシヨーを見かけていたということを明かす、という順序になっている。ところが、実際の出来事が起きた順序はこの逆である。即ち、深夜にヴィリヤーズがクラシヨーを見かけ、その後彼が自殺し、号外の記事になる、という順序であったはずだ。事実関係を把握しづらいこのような例は枚挙に遑がない。

更に、様々な異様な事件を描いてはいるものの、それらは具体性に著しく欠けているという点が問題点として挙げられる。ヘレンがレイチェルやトレヴァーに対して森の中で行なった行為の詳細は語られず、結果として二人の子供が異常な状態になったしまったということのみが語られているし、作品の最後で言及されるヘレンの死と変容の様子にしても、最終章のフィリップ博士のメモによってかなりの量の説明を読むことはできるものの、彼は、“... for one instant I saw a Form, shaped in dimness before me, which I will not farther describe.” (47) と述べていて、肝心な点は読者の想像にまかされてしまっている。フィリップ博士自体も誰であるか判然とせず、作品の最後になって突然現れて来た感が強い。それにしてもヘレンの死の詳細を語るというかなり重要な役目を彼は負わされているのである。最終章では作者が事件や事故の詳細を描いてみせる代わりに、登場人物が書いた文書を持ち出して来て、説明の不足を補っているようにも見える。先ほどは余韻が残ると述べたが、作品の締めくくりの効果という点では多少物足りない感じが残るというのもまた事実だ。

このように、様々な問題をこの作品は抱えていると言い得る。しかし、だからと言って、この作品に価値がないということにもならない。そこで以下においては、上記の3点それぞれについて、作品の解釈をしつつ、なぜこのような錯綜した形式と奇怪な内容をこの作品が持っているかの理由を筆者なりに解明し、読者は一体どのような態度でこの作品に接するべきかを検討して行きたい。

III

問題の第1点は、主な登場人物である数人の男性たちの関係が不明確になっ

ている嫌いがあるという点だ。再読、三読すれば、それぞれの人物はきちんと描き分けられていることが分かるのだが、初読の際にはいかにも不分明な印象を受けるはずだ。その要因を考えてみると、それぞれの人物に特有の日常的な生活の場面の描き分けがあまりなされていないことが挙げられるだろう。彼らのそれぞれは、確かに、同じ職業のものはいず、別個の生活を送ってはいる。たとえば、作品の冒頭で登場する作中での年かさのグループに属するレイモンド博士とクラークは、前者は医者で後者は実業家である。作品の半ばあたりの主要人物である、クラークたちより一つ後の世代に属する3人の友人同士を比べてみれば、ハーバートは乞食にまで零落しているから、金銭的な境遇は彼だけ全く異なっているが、ヴィリヤーズとオースチンの両名はともに比較的裕福な紳士階級に属している。だが、ハーバートにしても、もしヘレンによって零落していなかったならば、彼らと同程度かそれ以上に裕福であったはずだ。彼らの年格好に関しては、ヴィリヤーズとハーバートとは大学の同窓ということもあり共通している。オースチンの年齢は明らかでないが、おそらくヴィリヤーズらと同世代であろう。¹⁰ オースチンとヴィリヤーズとは、先述の様に、お互い同士が情報を伝達し合っているが、そうした部分は主にこの二人の会話で成り立っている。従って、発話者が誰であるかを読者がきちんと意識していないと、両者の区別は付けづらくなってしまふ。また、両人ともロンドンの人や町についてとても詳しいという設定になっているため、それぞれの個性も重なってしまうことになり、オースチンとヴィリヤーズの区別が読者の理解の中で曖昧になって来てしまふ。

人物の区別が曖昧になるということに関して言えば、クラークとオースチンの趣味が似通っていることも問題だ。クラークは「備忘録」の編集を趣味にしていて、暇な時間にはそれを持ち出して読み返しては編集作業に没頭すると言う設定である。一方、オースチンは、世界の珍しい品物を収集することが趣味のようだ。一見全く異なる趣味であるかのように見えるかもしれないが、共に屋内の趣味であることと、クラークがライティングビューローに向かう姿と、オースチンが戸棚の中から珍品を取り出してくる姿とが重なるため、両者が読

¹⁰ オースチンの年齢に関して The Creative CAT は「オースティン>クラーク=レイモンド>ヴィリヤーズの順に年令ないし地位を措定」したと述べている。
<<http://www.asahi-net.or.jp/~yz8h-td/misc/ggpan10ja.html>>

だが、彼がヴィリヤーズに呼び出されていること、客として来ている際に新聞の号外をわざわざ外に買いに出ていることなどから、オースチンが最年長であるとは考えづらい。

者に与える印象も重なってしまうという問題が生じて来る。

登場人物の描き分けをしっかりとするためには、各章ごとに登場する人物を世代別にしておくという方法もあったと思われる。第1章ではレイモンドとクラーク、第3章ではヴィリヤーズとオースチン、というように、人物は世代別に登場していた。実際、レイモンドとクラーク、メアリーの世代と、ヴィリヤーズとオースチン、ヘレンの世代とは、ちょうど1世代離れているはずであり、それぞれの世代の人物が、第3章までは個別に独立して扱われていたのである。ところが次の第4章になると、ヴィリヤーズがクラークを訪問している。この両者は実は知り合い同士であったわけで、この時点で各章で別々に登場していた人物間の関係はつながりはする。だがその一方で、各世代間での描き分けという点に関しては、かえって曖昧になってしまったと言えるようだ。

別の見方をすれば、この作品では各世代に主な人物を配しながら、結局は皆がつながりを持っていたということが徐々に明らかになって来ると言うこともできる。ただし、誰と誰が知り合いで、誰と誰がそうでないかを思い出すことは容易ではない。各登場人物が、知り合いながら、情報を共有して行く過程は、メアリーの娘が、ヘレン・ヴォーン、即ちハーバート夫人、即ちボーモント夫人だった、ということが明らかになるのと平行しているとも言える。作品のテーマとしては、謎であったこの女性の正体が、各人の視点を総合して明らかにされる過程をいろいろな方面から描いて行くことにあったとすれば、上記の様に登場人物たちの描き分けが上手く行っていないという非難は的外れなものであるかもしれない。あくまでも物語の中心はヘレンであり、それを取り巻いてロンドン市中を右往左往している者たちがおり、また、過去の事情をじつと心の底にしまい込んでいる者もいる、生きているものもいれば、死んでしまった者もいる、という構造になっていると考えられるのだから。この作品で最も出番の多い人物の一人であるヴィリヤーズにしても、彼は主人公であるというよりはむしろいわゆる狂言回しの役割を負っていると言うべきであろう。

IV

問題の第2点は、時間経過を把握する際の困難さについてである。大筋は分かるようになってはいるものの、時系列的に出来事を隈無く再構成するにはかなりの労力が必要なのである。時間の経過を把握しづらいことの原因の一つとして挙げられるのは、登場人物たちがみな過去を振り返って様々な謎を見出し、それを解き明かそうという態度であることが、大きな要因となっている。謎を

取扱う作品そのものの書き方自体を別にすれば、各人物相互の情報伝達の遅さにもあると考えられる。場合によっては偶然街中で人と人が出会うということもあるものの、情報を伝えるには人物同士がお互いを訪問し合い、実際に面と向かって語り合うことが必要なのだ。また、手紙のやり取りによって情報が伝達され、物語が進行する場合があるのだが、手紙という情報伝達の手段では、面談するよりも更に多くの時間経過が伴いがちであるという事情もあろう。例えば、既に死んでしまっていることが明らかになっている、画家のメイリックの身の上に、実際にはいかなることが起こったかを読者が知ることができるのは、彼の臨終に立ち会った医師にオースチンが問い合わせをした手紙に対する返事が遙か南米からもたらされた後である。このように、事実が起こった時点とその事実に関する記述との間には時間のずれがしばしば見られる。

従って、物語の流れについて現代の情報化社会の読者がまだるっこしい感じを持ってしまうことは、電話すらまだない19世紀末の作品としてはやむを得ないことなのである。また、かなり後で情報がもたらされて、当時の真相が分かるというような状況は、我々の生活の場面でも実際に起こり得ることであり、それほど大きな問題ではないとも言える。だが、作者はあえてこのような変則的で分かりづらい手法で書いているようにも思える。このような場合、読者は自分の頭の中で事実の前後関係を再構成せねばならないことになって来るのもまた事実である。つまり、読者が物語の時間的な経過を十分理解するためには、再読三読が必要となるのである。仮に、読者が文学研究者などならば、個々の出来事が起きた時期やその順序について、いちいちメモを取りながら読み進めれば良いだろうが、一般の読者にそれを要求するのは難しいかもしれない。この様に考えてみると、この作品は、万人に向けられたものではなく、ある意味で読者を選ぶような作品に属すものなのだとと言っても過言ではないと思えて来る。

だが、読者がこの作品で時間の経過を把握する上で最も重要な点は、第4章でポール街20番で発見された肖像画を見たクラークが、その類似を指摘した二人の女性、即ちメアリーとヘレンの関係を、読者がはっきりと把握することであろう。ヘレンがメアリーの子であるということ、従って、この二人の年齢差がちょうど20歳内外でなければならないということをよく覚えておきさえすれば良いのだ。

この作品はいろいろな謎に満ちているが、その中心は、ヘレン・ヴォーン、ハーバート夫人、ボーモント夫人が同一人物であるか否かということだろう。これは比較的分かり易い謎であると言える。それ以外には、ヘレンがどのよう

にして特殊な資質を身につけ、いかにして多くの人を苦しませて死に至らしめたかという彼女の経歴と行為に関わる謎もある。そして、メアリーとヘレンが具体的にどのような怪異な体験をしたかということも謎となっている。これらの謎は、結局は解きたい謎であろう。これに対して、ヘレンとメアリーの親子関係は、謎というほどのものではなく、作品の中に大きな矛盾点も見受けられない。読者はこの二人の年齢差から逆に考えて、レイモンド博士やクラークが、ヴィリヤーズやオースチン、ハーバートやメイリックより一世代分年長であるに違いないという推測をすることができるし、それが正しいことを後で納得するということも起こり得る。肝要な点は、読者がメアリーとヘレンを物語の時間軸の中心に置いて考え、それに沿って様々な事件や事故の記述を配置して行くような読み方をすることができるかどうかという事である。

時間経過が理解しづらいことの理由を考えるには、マッケンの小説技法の良し悪しも大いに関係するであろう。彼は、もっと分かり易く書くこともできたはずである。だが、この作品を書くに際して彼が意図していた根源的な怪奇とは何であったかを考えてみることも必要だろう。それは、古くローマの遺跡が作られた時代から下って現代のイギリスの片田舎によみがえって来た「パンの大神」の影響が、ヘレンというギリシャ時代の美女と同じ古風な名前を持つ一人の女性と、彼女と関係を持った多くの男性とを恐ろしい結末へ追い込んでしまったことを語ることに他ならない。そうであれば、ローマ時代から現代（19世紀末）に至る 2,000 年の長い時と比べれば、10 年、20 年などは一瞬に過ぎないということであろう。更に言えば、事実の前後関係などは実は大して重要ではないという意識を作者は持っていたのかもしれない。ヴィリヤーズを始めとする各登場人物による探求の結果が最終的に読者の前に明らかになって終わることが最も重要な点である。読者は、探求、探索の過程で、各登場人物とともにあたかも推理の迷宮をさまようかのような感覚を持って作品を楽しむことができさえすれば良いとさえ言い得るのではないだろうか。もしそうであれば、年表風に時間の流れが上手く腑に落ちるような書き方より、時間が前後したりあやふやになったりしていた方が、怪異な物語の書き方としてより相応しいと言うことも可能だろう。従って、時間経過の不分明さは、一方ではこの作品の瑕疵であり、また一方では美点でもあるということになる。

V

問題の第3点は、異常な出来事それぞれの説明が具体性に欠け曖昧なままに

なっていることと、物語に文書や手紙の類が多く引用されていることについてだ。この両者は一見関係がなさそうに見えるかもしれないが、実は深いところにつながった同根のものであると考えられる。この作品では様々な非日常的な事態が起こるが、そうした事件事故の異常さを直接的に描くことは注意深く避けられているし、仮に作者が少し詳しく描き始めたと思われる場合でも、最後まで描き尽くされることはなく、記述の途中で意図的に中断されてしまうということが頻繁に起こっている。例えば、レイチェルがヘレンとともに森の中にいた時に体験したのはどのような事柄であったかが書かれている第2章「クラークの備忘録」の中でも、“Rachel told her [mother] a wild story. She said—” (13)と、記述が中断されていて、核心的な事実は明らかにされない。レイチェルは母親にこの後の部分話を話したはずであるし、クラークもフィリップスからこの話の結末までを聞かされており、覚書きの中にもそれが当然書き込まれているはずなのに、読者に対してだけは、事の真相は伏せられてしまっているのだ。

もちろん、レイチェルの身に起こったことを我々が推測することは十分可能なことではある。それは、最終章のクラークの手紙の中でも振り返られている。“And into this pleasant summer glade Rachel passed a girl, and left it, who shall say what?” (49)とあるから、容易に想像はつくのだ。更に例をもう一つ挙げるとすれば、ヴィリヤーズが入手し、オースチンに見せたことになっている「ポーモント夫人がとびきりの上客にだけしたサービスの報告書」“an account of the entertainment Mrs. Beaumont provided for her choice guests” (42)もそうだ。オースチンは中身を拾い読みするだけなので、彼女のサービスの内容がいかなるものであるかの詳細は全く明らかではなく、多くは読者の想像に任せられているのである。こちらに関しては、レイチェルの場合ほど想像することが簡単ではないようである。いずれにしても、これからまさに衝撃の事実が語られようとする矢先に、大抵の場合、作者は意図的に筆を止めてしまっているのだ。

恐らくこの手法に対しては、我々21世紀の読者の大多数は、なぜもっと核心的な記述をしてくれないのかという不満を覚えることだろう。しかし、この点を考察する場合には、当然のことであるが、我々は時代の制約を勸告せねばならない。この作品が執筆され始めたのは1890年頃からと言われている。出版されたのは1894年のことであり、時代は既に世紀末であるとは言え、未だに根強いヴィクトリア朝の規範に照らしてみれば、今となっては何でもないと思える記述も、当時としては作家にとってかなりの冒険だったに違いないからだ。それは、性的な描写について顕著である。S. T. Joshiは作品集のIntroductionでこのことを指摘して以下のように述べている。

Throughout the novel Machen hints at illicit sex in a way that to us seems coy but to his original readers would have appeared suggestive to the point of obscenity. (xiii)

事実この作品は、巷間、相当酷評された由である。¹¹ 従って、今日のみで見るとその記述が不十分に見えると言っても、それは致し方ないことである。だが、世紀末の怪奇小説の作者としては、実際は物事をもっと明示的に書きたい気持ちもあったに違いない。しかし、それは十分にはできないことであった。そこでマッケンはある手段に訴えることにしたという訳だ。それは、地の文では書きづらい事であっても、手紙や覚書きの引用の形を取れば、作者の責任を当該の手紙の書き手に転嫁できるということである。実際には、作品中に引用されている手紙やメモ、碑文なども、それ自体は作者の創作であるはずだから、この理屈には欠陥があるのだが、表面的には作者とは別個の人物に仮託すれば、どんなことでも記述することが可能となるのだ。この作品に多くの引用があるのはこうしたことも理由の一つになっていると考えられるのである。

更に、この方法にはいろいろな利点がある。それは複雑な内容を一挙にまとめて提示する事ができるという点である。同じ事を登場人物間の会話で行なおうとすると、相当煩瑣な事になってしまうだろう。それに対して、手紙や覚書きならば、基本的には書き言葉を使うことができる。また、筆者が十分な時間をかけて書いた事にすれば、相当複雑な内容でも順序正しく提示する事も可能だ。たとえそれがマシスン博士の報告のように、当初は走り書き程度のものであっても同様だ。急いで書かれた彼の原文はラテン語であるが、英訳という編集作業を経ているので、文章の体裁は整っている。¹² 更に、内容はどんなに衝撃的な事でも良い。会話では相当はばかれるような複雑な事や衝撃的な事であっても、書き物であれば可能になるということである。

最後の段階で何らかの文書や手記などを提示するという手法によれば、本編で書ききれなかった事柄を最後に明らかにする事もできる。そして、地の文と引用とが相まって物語全体に明確な形を与えられるということになるのだ。と

¹¹ Patricia Merivel, *Pan the Goat-God: His Myth in Modern Times* (Cambridge: Harvard UP, 1969), 163-64.

¹² マシスン博士の報告文中には一部欠陥があることになっていて、全体的に不完全な印象になってはいるが、このことで報告文そのものが現実的な存在感を持たされていると言うこともできる。

いうわけで、手記や手紙の類を作品に取り入れる手法は、使い方次第では随分と利用価値が高い技法であると言える。とりわけ、恐怖小説、探偵小説、推理小説などの謎解きに関わるタイプの小説では、有用性の高い手法であるということである。例えば、スティーブンソンの『ジキル博士とハイド氏』もこの手法で書かれているし、ドイルの『緋色の研究』や、クリスティーの『そして誰もいなくなった』も同様だ。マッケンは自身の『三人の詐欺師』に関して「スティーヴンソンの手法に倣った」という趣旨の発言をしていることから、マッケンをスティーブンソンの亜流と見なす向きもあるようだが、「パンの大神」においても彼の影響はどうかやらず無視できないようである。ただ、『ジキル博士とハイド氏』や『そして誰もいなくなった』の結末部分の書簡は、それぞれの中心人物の告白で成り立っていて、作品自体の謎がことごとく氷解する形になっているのだが、この点はマッケンと大きく異なっている。仮に上記の2作品の仕方を彼がこの作品で採入れたとすればどうであろうか。その際は、ヘレン自身の書いた文章が作品の結末部分で提示されて終わるといった形が想定されるだろう。それは、あたかも、後にマッケンの「白魔」で描かれることになる少女の手記の短縮版のようになったはずだ。その結果「パンの大神」が一体どのような作品に変貌したかを想像することも興味深いことではある。

VI

結局のところ、この作品では個々の事件の真相は明らかにされず読者の想像にまかされている感が強い。但しそれらは、読者の資質にもよるが、全く想像の付かないものというほどではなく、ある程度は想定可能な範囲に収まっている。先述のように、具体的に、最後まで書いてないのは事実であるものの、だからと言ってそれを非難するには当たらないだろう。こうしたことは、あまりにあからさまな記述は控えることを要請する 19 世紀末の時代の制約ということもあるだろうし、作家として読者の想像力を尊重するという態度の表明ともとれるのである。

表題中の「パン」に関しても事情は同じである。この作品は「パンの大神」を表題としているので、「パン」自体が描かれるかと思うとそうではなく、彼は陰の部分に留まっているため、その姿は読者が想像する他ない。Aaron Worth は、“Arthur Machen and the Horror of Deep History”の中で、“The central horror about which the narrative circles—the figure of Pan himself—”と述べているが、確かに我々は「パン」の周りを遠巻きにしているような感覚である。作品中には

トレヴァーの言うところの「森の変な人」が出てくるし、クラークの想像としてレイチェルと並んで歩む姿も仄めかされているので、パンが全く登場しない訳ではないが、むしろある種の象徴と見なすことが正しい理解の仕方だろう。作品の冒頭でレイモンドが言っていた「パンの大神を見る」とは、パン自体を目撃することというよりはむしろ、ヴェールの彼方の世界を体験することだった。そして、その体験の結果、人々が陥ってしまった異常な精神と肉体の状態を描くことに作品の主眼があるのである。

従って、パンという名で示されるものには、本作品では、様々な別名が与えられることになる。それこそ、メイリックの素描集の序文で言及されたアイギパンであり、碑文に彫られたノーデンスの神であったと言える。トレヴァーはフーンないしサティルの首を見たのであるし、素描集の絵には“Fauns and Satyrs and Ægipans” (30) の姿が描かれていたのである。これらはみな異なる名前前で呼ばれているものの、パンを含めたこれらすべてが、現実の世界の裏面にもう一つの別の世界が隠されていることを示す象徴としての役割を果たしているのである。従って、これらの異教の神はおしなべて不吉な性格を与えられていることになる。この点については、古来からのイメージと多少かけ離れているかもしれない。パンの性格付けとしては、大きくは *benevolent* なものと *sinister* なものとに分けて考えることができるのであるが、この作品のパンやそれと同等の神々は、専ら不吉で禍々しい感覚を起こさせるものとして想定されているのである。¹³

では、マッケンはこの作品で結局何が言いたかったのだろうか。それは一口で言えば、かつては存在していたが人類の文明化の過程で隠されてしまい現在ではこの世界の表面には現れてこないものが、この世界全体の裏側に今でも厳として存在し続けていること、その事実を人々は全く意識していないこと、そしてほんの少しのきっかけで、隠されたものが突如として禍々しい姿を現してしまうことがいついかなる時でも起こり得るというようなことだろう。そしてそれが起こる場所は、場合によってはウェールズの草深い田舎であったり、大都会のロンドンであったりする。メイリックが南米で死に至ったことを考え合わせれば、こうした顕現は、地上のどこでも起こり得るということにもなるのだ。更に、この作品の全ての怪事はたった一人の女性によって引き起こされているのであるが、これがもし複数の人物によって引き起こされたならば、そ

¹³ 近現代の芸術作品におけるいろいろな種類のパンとその分類法に関しては、Patricia Merivale, *Pan the Goat-God: His Myth in Modern Times* を参照。

の結果は更に広範囲に及んだであろう。レイモンドの言っていたように、この世は一場の夢に過ぎず、真実の世界は現世という幻影の彼方にあるのだ。ところが、我々はこのことに無知のまま、のうのうと生きている。しかし、いったん真実を知ってしまったら、その結果は一体どのようなことになるのだろうか、というような感慨を、この作品に触れた多くの読者が抱くことにもなるだろう。

マッケン晩年の作品「N」でも、普段は人の目には見えない風景をロンドンの近郊である日突然見てしまった人の話を読むことができる。この隠された風景は、現代の灰色の大都市ロンドンとは対極的に、緑にあふれ、優美な建物が建ち、見る者に憧憬を抱かせるような大変美しいものだ。一方、「パンの大神」では、隠された真実は、その様子自体は謎のままであるにせよ、怪異でグロテスクなものであるに違いない。それを見ただけでその人に死をもたらすものであるという点で対極的である。しかしながら、いずれの場合も、現世の裏面に誰も知らない真の姿が隠されているということを基本的な主題としているという点では、この二つの作品は同じなのである。ひいては、マッケンの書いた作品のいずれを取っても、こうした信条が込められているということさえできるだろう。

結び

「パンの大神」を分類する際、多くの場合は、恐怖小説、怪奇小説の範疇に入るとされている。だが、以上のように考えて来ると、それは少し間違った分類ではないかと思われる。この作品の本質は、人々の心に恐怖を起こさせるというよりはむしろ、奇異な感じ、不思議な感じを生じさせるものだという方が妥当である。とりわけ、恐怖に慣れ切ってしまった現代人、あるいは恐怖を忘れてしまった現代人に取ってはなおさらだ。例えば、この作品のクライマックスとも言うべきヘレンの死の様子にしても、女性が男性に変化し、獣の様相をへて更に悪いものに至るといって、現代の科学でも説明不可能な衝撃的なものではあるものの、別の見方をすれば、あまりにも荒唐無稽であると言えなくもない。この場面には恐怖心よりは奇妙な感じの方をより強く持つ読者が多くいてもおかしくはないだろう。

この作品は、内容が奇怪な謎に満ちていることに加えて、その構成が複雑で読みづらい面が多々あることが特徴になっている。作品の構成自体がどうなっているのかを読者が考えながら読んで行くことで、謎解きの楽しみがより多く与えられるような種類のきわめて特殊な作品であると言えることができる。作品

の本文に多く引用されている手紙や覚書き、新聞記事や碑文の銘などの存在理由は、作品の構成をより複雑にしつつ、奇怪な内容に奥行きを与える役割も果たしていると考えられる。作中にはいくつものラテン語の語句や文が挿入されていたが、これらの存在理由も同じように考えて良いだろう。その中には英訳が付けられたものもあったが、そうでないものもあった。ラテン語を要所で用いるのはマッケン特有の手法であり、以後の様々な作品でも常套手段として用いられることになる。これは、一種の銜学趣味であるとも言えるが、ラテン語によって作品に深遠で高尚な雰囲気が備わると同時に、ラテン語という過去の言語を用いることで、過去を振り返って探求して行こうという態度そのものが作品全体に込められていることを作者は上手く表現しているとも言えるのではないだろうか。

また、時間の流れについては、物語の中で、語られた時間と、語りの時間が前後しているために、理解がしづらくなっている面があった。この点に関しては、ヘレンという女性にまつわる謎を提示しながら、その謎を解き明かして行く過程そのものが複雑になることで、謎自体を更に深める効果をもたらしていると言えるだろう。このような種類の作品に慣れていない読者ならば、戸惑う面も多々あるだろうが、この複雑さこそマッケンならではの特質になっていると考えれば、煩雑だという評価は、ある意味での的外れなものと言えるだろう。

作中の主な登場人物の描き分けに多少の難があった点は、ヘレンをとりまく人々が結果的に共同する形で謎に挑んで行ったことが要因の一つである。その中で主要な役割はヴィリヤーズが果たしていた。ただし彼は主人公であるとは言いがたい。彼はいわゆる狂言回しの位置にとどまっているからだ。あるいは、謎の中心人物であるヘレンが主人公であると考えべきなのだろうか。いっその事、現世の影を象徴する「パンの大神」こそが主人公だと見なしてはどうだろうか。様々な考え方ができるだろうが、筆者としては、この作品には普通の意味での主人公は存在していないと言いたい。そしてそれに代わるものとして浮かび上がって来るものは、「パンの大神」に象徴される世界の影の真実の姿をめぐる不思議な感覚そのものであると考える。この作品は決して単なる恐怖小説ではないのだ。そして、その真価を十分理解するためには、複雑な構成、人物の関係や時の流れの把握し難さ、事件の真相が途中までしか明かされないこと、様々な分書類の引用と意味深長なラテン語を読者が自分なりに理解し納得しながら読んで行けるかどうかが必要条件となっているのである。

参考文献

- Lovecraft, H. P. *Supernatural Horror in Literature*. New York: Dover, 1973.
- Machen, Arthur. "The Great God Pan." *The Three Impostors and Other Stories: The Best Weird Tales of Arthur Machen, Vol 1*. Ed. S. T. Joshi. Oakland, CA: Chaosium, 2001.
- Merivel, Patricia. *Pan the Goat-God: His Myth in Modern Times*. Cambridge: Harvard UP, 1969.
- Roberts, R. Ellis. "Arthur Machen." *The Sewanee Review* 32 (1924): 353-56.
- Worth, Aaron. "Arthur Machen and the Horror of Deep History." *Victorian Literature and Culture* 40 (2012): 215-27.
- 富山太佳夫「夜、歩く人」『幻想文学』第4号、1983年、62-67頁。
- 平井貞一訳『アーサー・マッケン作品集 第1巻』東京：沖積社、1994年。
- アーサー・マッケン著、高木国寿訳「N」、J・L・ボルヘス他著『架空の町』東京：国書刊行会、1997年。
- アーサー・マッケン著、The Creative CAT 訳「パンの大神」2013年9月30日
<<http://www.asahi-net.or.jp/~yz8h-td/misc/ggpan10ja.html>>